

『計量国語学』アーカイブ

ID	KK290604
種別	追悼
タイトル	水谷静夫先生 追悼文
Title	Tribute
著者	仁科 喜久子
Author	NISHINA Kikuko
掲載号	29巻6号
発行日	2014年9月20日
開始ページ	173
終了ページ	174
著作権者	計量国語学会

水谷静夫先生 追悼文

東京工業大学名誉教授 仁科喜久子
(1977 年 3 月 東京女子大学大学院修士課程修了)

水谷静夫先生のご逝去を衷心よりお悔やみ申し上げます。

私は 1965 年、東京女子大学日本文学科 2 年生のときに、国語学演習で初めて水谷先生の指導を受けました。その翌年、先生は米国に留学されましたので、引き続いてご指導を受けることはできませんでしたが、それから 9 年後の 1975 年に大学院文学研究科修士課程に入学し、水谷研究室の学生になりました。すでに日本語教師として仕事をしていたので働きながらの在籍でした。東京女子大学では大学院文学研究科設立間もなくのことで、その年度の水谷研究室の学生は私一人であり、非常に贅沢な教育環境でした。数理言語学、意味論、論理学などの講義も受講し、ゼミでは先生に指定された日本語構文論に関する言語学書を読み、その中にある問題点を議論するという形式でした。在学中は、言語学や隣接する学界の著名な先生方に「不肖の弟子」と紹介され、学際的な学会、研究会などに出席させていただくことで、学界の活動も知ることができました。

当時、水谷先生の教え子の皆さんからの要望で結成された勉強会があり、「mog の会」(mizutani old girls の略、mog は英語で「ゆっくり静かに歩く」と言う意味もあることから小文字で表示する)と呼ばれており、その仲間にも入れていただきました。そこでは、先生のライフワークであった「岩波国語辞典」をはじめとするとご研究の一端をお話ししていただいたり、卒業生が関心のある事柄を発表し、討議したりするというもので、先生がお元気でいらっしゃった最近まで続いていました。「mog の会」の参加者は、時とともに 20 代から 60 代になり、幅広い年代で構成され、言語処理・国語学・国語教育・日本語教育などの世界で働く水谷先生門下生とともにことばに関する多様な問題を学ぶことができました。

また、私の在学時には東京女子大学では、他大学との単位互換制度が始まっており、水谷先生の先輩であり、私の卒業論文の指導教授であり、その後上智大学教授となられた故森岡健二先生の下でも私は講義を受講するように言い渡され、上智大学の大学院ゼミにも週 1 日は出席しました。そこでは大勢の仲間と勉学を共にする機会も与えてくださいました。先生には大学院生として学び、見聞を広くするチャンスをできるだけ多く与えようというお考えがあったのだと思いました。

最後に先生の真摯で筋の通った美学が伺えるエピソードを述べます。あるとき東京女子大学日本文学科紀要に論文を投稿することになり、先生の指導を受けながら四苦八苦して書き上げ提出しました。先生が受理して下さったので、ほっとして、暢気に帰宅しました。それがずいぶん後になって、故水野弥穂子教授から水谷先生は私の作成した表の数字などを検算して夜遅くまで原稿を見てくださっていたことを告げられました。私はその時まで、

先生にそのような労をおかけしたことを知りませんでした。そして、「水谷先生はそういう方です。立派な師とはこのようなものです」と言われたことが深く心に残りました。その後、恩返しができないまま今日に至っています。

東京女子大学では先生ご退職の後も志が受け継がれ、優秀な卒業生を引き続き輩出しております。先述の「mogの会」には地理的その他の諸事情で参加できなかった水谷先生の教え子の方々が広く社会に貢献されていることを申し添えます。先生のご指導は非常に厳しく、私を含め恐れていた教え子も多かったのですが、教え子に対してご自分の学問に対する信念を最大限伝えたいという態度で接しておられました。卒業生はそれを理解し、慕ったのだと思います。計量国語学会の運営、「岩波国語辞典」もそれぞれ優れた教え子の方々が引き継いでいらっしゃるので、先生も安心して逝かれたことと存じます。先生の御恩に感謝するとともに、ご冥福をお祈りします。合掌